

ディスカッション

やまだ 指定討論ありがとうございます。全体を判断して焦点化していくのではなく、どこに焦点を絞ったのか、どこに関心があったのかという質問がありました。ご指摘いただいたことに関して、私の場合は、テーマが「どのようにして、ことばが生まれてくるか」というところにありましたから、ことばの基礎には何があるのか、ある転回となる時期には、コミュニケーションの質がどこが違っているかに観点があると思います。コミュニケーションを生み出す関係性のなかで「意味」が生まれてくるプロセス、バーバルなものへどう移行していくところを中心に見ていきかけたということですね。

綿巻 私の場合は大体、本から学んだことが多かったように思います。本の中にチラッとこういうことが書いてある言葉があったり、そのためにはどの程度、記録を集めるのかということ、白紙から集めていかないと、結局、どれが後になって、どこが役に立つかわからないので、作業的には大変な作業であることは間違いありませんけど、後で、記録をとったものを整理する作業があって、その中でまた気がついてくる面もあります。

麻生 僕の場合は、生後直後から関心としては、アイコンタクトとか、表情とか、スマイルとかいろいろありましたし、授乳記録でも何cc飲ませて何分かかるかというような表をつくって、そういう睡眠や食事などの生活のリズムを1年間くらい記録していました。子どもの行動の変化にあわせてその都度、だんだん焦点の中心になるテーマが変わってきました。模倣する時期には、そういうものに焦点が変わるし、生後2年目くらいになってきて、だんだんしゃべるようになってくると、表情を微細に記録することは難しくなってきます。新生児のときは他に記録することがないから記録できるのですが、しゃべるようになると、ことばを記録し表情を分析的に記録することは不可能に近くなります。4、5歳になってよくしゃべるようになってくると、もうつきあいきれないというか、1時間も一緒にいると記憶しきれないほどのインタラクションが成立します。子どもと交流すれば、書けなくなる。見たことを覚えきれず、また見たことを書く時間が膨大に必要なってくる。そこ

で、どうつきあわないようにするか、どう観察しないようにするといった、倒錯した状態になり、テーマはコロコロ変わらざるをえません。子どもは目の前で変わっていくので、その都度こちらのテーマも変わっていきます。もちろん関心としては通底するものがありますけど。

秦野 私は日誌研究の前に重度の自閉症の子どもたちを障害児施設で見ていたので、言葉が出てくるプロセスということが最大の関心事でした。つぶさに見ていて、何が言葉に出てくるかわからないので、はじめに言葉に出たものだけじゃなく、関係が網の目になっているものはできるだけ何でもみていこうと思いました。何でもみていこうと思っても、みえるものではないし、書けるものではないので、どこかに問題意識を非常に鋭く持っていながら、できるだけ幅広く記録をとるという感覚しか言えないのではないかと思います。日誌研究会の時代は、今ほど、いろいろな記録方法がなかったのですが、今は24時間、全部録画することが可能です。ではハイテク機器を使って、すべての必要なデータを全部記録できるかということ、ちょっと違うのではないかと思います。録画は、日誌を書くのとは違って、あるまとまりをもって記録できることはあります。そういう点で記録の方法としては必ずしも日誌にこだわる必要はない時代になってきました。

ただ研究者が自分の頭や身体や体験を通してあるまとまりを持って見ていくような大きな視点、そういうもので、しかも継続して変化を見ていくことが、かなり重要なことではないかなと思います。どんな断片でも全部記録して24時間分の記録ができるわけですが、それが必ずしも私たちがめざしていることではないと思います。

麻生 日誌では書ききれないということと、ビデオがあれば完璧な記録があるなということを思ったのですが、よく考えてみると、ビデオは本質的な解決にならない。ビデオによって質的な観察がどうなるかと言うと、たとえば24時間分のビデオを見た時、見てどうするのかと言うと、ものを考えるためには、単に見るだけでなく、その24時間見たビデオの内容を、改めての言葉で書き表さなくてはいけない。見たことが何であるかを、また言葉で書く。つまり24時間撮ったビデオを改めて文字に書くことになってしまうわけで

す。それなら、直接見たことを文字に書くのと、一旦ビデオに取りそれを見て改めて文字に書くのと、どっちがいいのか。両者の差異は確かにありますが、果たしてビデオの方がよいと言えるのか。第一に、ビデオを文字に起こすには、大変な時間がかかる。第二に、ビデオのカメラの視点は、固定しており視野が極めて狭いという特徴がある。第三に、ビデオには視覚情報と聴覚情報しか記録されていない。生の観察者なら感じる五感全体を用いた情報がそこには記録されていない。ビデオの利点は、何度でも見ることができ、細部を自分だけではなく他者とともに確認できることです。30分間観察するためならビデオを用いるのもよいでしょう。しかし、24時間体制で365日観察するとなれば、観察したことをビデオで撮ったとしても、ビデオを丁寧に何度も見ている暇が実際あるかと言うと、おそらくないと思うのです。私も1週間に1度、20分弱ほどビデオにとることしましたが、それを起こすのに数時間かかりました。これに対して、生の観察記録はそこまで時間がかかりません。それは、微細なことを認知できずまた多くのことを忘れるからです。しかし、生の観察記録には、視覚情報や聴覚情報でない、五感全体を使ったデータが圧縮されています。言語で書くというのは情報を圧縮するわけです。生の現象をそのまま人間は考えることができない。どうしても言語化しなければならない。とくに最終的な成果が書物や論文のような形で世に問われる学問である限り、必ず一度は、徹底的に言語化するという行為をくり抜ける以外には方法がないわけです。どんなにコンピュータ化が進んでも、映像が自動的に撮られ画像解析がどれだけ進んだとしても、最後の最後は、結局人間の観察力と文章化能力に頼らざるをえないわけです。これは逃れられない。

私は日誌をコンピュータに入れてなくて、今、読み返すと、ものすごく時間がかかるのですね。だけど自分が本気で考えるのだったら、自分の書いたエピソードが自分の頭の中にしっかりおさまっていないと、話にならないわけです。それをコンピュータで、例えば「数」「数概念」「1つ」「2つ」「3つ」などと打ち込むと、日誌データから関連エピソードが検索されるとしても、それでは、発達のエピソードが有機的連関でつながっていかないように

思うのです。そこは、ポンコツになりかかっているとしても自分の脳を使った方がよい。コンピュータで、パッと同じものが出てきましたと言っても、それをまとめて考えるのと、自分の脳の中でエピソードがつながって行って、それを基に考えるのとは違うだろうなど。自分が頭で濾過していくためには結構、手作業的な、時間がかかりますが、自分で読んで考えるためには、コンピュータを使わない方がいいんじゃないかなと思っています。

綿巻 それは確かにあると思います。ただ私も基本的には読み込み作業で、芥川の小説の分析についてもいきなりコンピュータでやっているのではなく、相当読み込んだ挙げ句に、何かこれが確かめられるかもしれないと思ったら徹底的に調べまくる。その作業はコンピュータがすごく有利です。昔、ハイパーテキストという考え方がありましたけど、私自身は濃度の部分に閃いて、自分が読み込んでいるものが記録をとっているうちに「エッ、これが？」という連想なんですけど、連想として閃いてくるもの、それをデータとして、どこにそれが隠れているんだということを探す。もう一回、全部読み直すことはできないですけど、記憶に止めておかないと、絶対にそれはできません。機械的にやっちゃうと、何もいいものではできません。

秦野 私はビデオの記録もずんぶん撮っています。日誌研究の以前は、オープンリールのビデオ（今では見たことのない人も多いと思いますが）で3年間ほどデータを撮っていました。乳児院と家庭と養護施設の3箇所、ひとりの子どもは毎月一回、一度に8時間データでとっていました。そのときの記録は、ビデオを固定して全て撮り、観察時には2名の者が同時に記録をつけました。ひとは自由記述、もう一人の人は15秒ごとのチェックリストの記録です。実はビデオは本当に見たいところは後で見られるかという見られないですね。自動フォーカスしませんから、その時、その子の隣にいた子はどうだったのか、その時の子どもの視線がどうだったとか、本当に見たい部分が実は見えないということは良くありました。とりあえず記録をとることがいいということでは、日誌的なことがもっとも使いやすいということになったと思います。

後は縦断データの分析の時に、その人の日常の言語使用をよく知っている

ことは、分類の精度を高めます。たとえば、語彙をカテゴリーに分ける時も、MULを算出するために接尾辞、接頭語を一つにカウントするのかどうか、派生語を算出するときも、「熊」と「熊ちゃん」と「お熊ちゃん」の違いを、その子どもの場合は異なり語とするのか、しないのかなどの分類も、その人の語彙のカテゴリーによって実は異なってきます。あるいはパターン化してやりとりをするというときも、何をもってパターン化してやりとりをするかという時に、その子の日常生活の中で成立しているルーティン行動は何かなどの情報が判断を助けます。もしある一つの刺激があると、そこから引き出された表現がつながって、言語の一つの構造化ができていくということがわかった場合、その子の反応はパターン化し他者と判断するわけです。そういう構造を日常的に持っていない子どもの場合には、その行動はパターン化としては取り出さないこととなります。日誌に限らず、カテゴリー分類もできないことがあり、そのあたりは皆さん、どういうふうになさっているのでしょうか？

綿巻 何か理論的なものを全く持たないで日誌をつけたのではないということですね。それぞれの人が、それぞれの理論なり、考え方なり、そこに何かあって、その中で子どものデータを集めている。日誌は定点観測というものとはちょっと違う意味で、いいところがあると思います。ビデオはできるだけ日とか時間を決めて、ある間隔をいわば機械的に置いていくことをしています。とった記録の分析についても、ビデオにはビデオに応じた分析対象があるし、日誌には日誌の対象がある。何でも日誌がいいとかではなく、日誌をどう生かすかというのが大事なように思います。

麻生 日誌の方が面白いのは、観察している内に思ってもみなかった問題が発生してくるところです。いわゆるビデオを用いた分析的な観察だと、細かい分析が可能だし、パターンなど定型的なものを捉えて行けて分かりやすいといったメリットはありますが、見えてくるものが小さくなってくる。ここでは、最初に見えている問題というのが想定されて、理論もあって、定型化がなされるということですが、日誌的観察の面白いところは、次に何が起こるかわからないという点です。子どもがやっていることって、びっくりする

んですね。模倣を見ていて、模倣ができる、できないと思っちゃうかもしれませんが、僕がびっくりしたことがあります。それは、息子が1歳5ヶ月30日、京都御所で、中の砂利道を歩いているときのことです。妻が7～8メートル先に走り、そこで自分の方に歩いてくる息子を写真に撮ろうと正面でカメラをかまえ、息子が近づいてくるので、カメラを構えたまま後ろに数歩下がったわけです。すると、息子は、家内の方に歩いてきたのをやめ、そのまま後ろ向きに3～4歩下がったのです。息子が後ろ向きに歩けたことも驚きでしたが、妻が後ろ向きに後退したのを、息子が真似して後ろ向きに後退したことはさらに驚きでした。こういう模倣は、やれといってもある時期まで決してやれないことだと思います。どうやって他者のそのような身体の動きを、自己のそれへと移し替えるのか、そのような身体図式がどのように成立するのか極めて興味深いことです。チンパンジーにはおそらくできないのだと思います。松沢哲郎さん（京大霊長研）の前で、アイちゃんやアユム君にはできないだろうと、このエピソードを一度自慢したことがあります。これは単なる親ばかりですが。日誌研究が面白いなというのは、H. ワロンの『性格の起源』があって、ああいう本を読んでいると、プレイヤーやサリーといった1880～90年くらいのヨーロッパにおける日誌観察を彼がたくさん引用していることです。ワロンは、ヨーロッパの日誌観察を好き放題においしいところ取りで勝手に引用して好きなことを言っています。うらやましいなー。あーやって好きに利用できるデータが欲しいなと思っていたのですが、日本にそういうものが、残念ながらないのですね。普通のお母さんが書いた日記も、その時の生活を示す意味で面白いのですが、果たしてその記録を観察された現象の記録として利用できるかという少し躊躇すべきところが残ります。そのお母さんが、そのように感じ思われたことは事実だろうから、その主観的な出来事の記述としては利用できますが、そのデータから模倣の発達について議論できるかという心もとないのです。そこは、やはり自然史の観察で鍛えられたような観察者の記録が欲しいわけです。そのような観察眼がある人の記録だと、その観察エピソードは一応出来事として信用できるのかなということがあります。そのような観察があれば、それをもとにワロン

のように発達について議論ができます。ところが、そういうものが日本にはない。だったら自分でつくれるわけですから、こんな面白いことはないだろうと思います。

日誌観察のいいところは、知らないような問題がものすごくたくさんある。問題も発見もできる。問題の答えというより問題が至るところにあるということで、今でも有効な方法だろうと思います。数学でも問題を解くことより、問題を見出すことの方がすごいと言うじゃありませんか。

やまだ 日誌がいいところもありますが、今は、これだけ観察・記録機器が発達しているので、日誌でポツポツと書いた言語記録と、ビデオで撮った言語記録では精度という面では全然違うので、日誌の限界というものを見極めないといけなんでしょう。インタビューをして話されたことばを、日誌記録やフィールドノートに書くなんてことは不可能だと思います。行動にしろ、言語記録にしろ、ほとんどリアルタイムで追いきれないものは、ICレコーダーやビデオを活用したほうがいいでしょう。自分で見たり、聞いたことでも、うろ覚えで後で書くと、曖昧で自分が理解できたこと以上のデータは得られない危惧が確かにあります。これだけ機器が発達している現在では、データをしっかりとらないといけな。それでも、なおかつ全体の脈絡とか意思疎通の全体とかの記述がないと、把握できないものが、確かにある。両方が必要ではないか。もちろんICレコーダーでも落とすものがたくさんあるので、いろんな水準の多層的なテキストを書くことが重要でしょう。リフレクティブに省察するという時に、ICやビデオ記録があると役に立つ。日誌研究の頃は、まだそれほど自覚的ではなかったんですが、自分は何を見ていて、何が拾われ、何が捨てられているのかということが多層的に、相当自覚的にしながら、テキストを書く、テキストを読む、テキストを解釈するという作業ができるようになった、今はいい時代が来たのではないかと思います。

麻生 「ICレコーダーで記録をとらない」と言う「科学的ではない」ということになったら、まずいと思います。ICレコーダーをとらなくて、家に帰ってきて、こういう話をしたんだろうなというのは、単なる解釈にすぎなくて、データではないのかと言うと、それもデータだと思うのです。なぜ

かと言うと多かれ少なかれ、どういう聞き方をしても、そういうところがあるだろうと思うのです。その信頼性が、どこまで反映されるものか、曖昧性がどこまで持っているかということについてはリスクを知らないといけないけど。それを頭ごなしに「非科学的、科学的でない」と言うと、またかつての行動主義のようにゴリゴリになってしまいます。結局、ICレコーダーをとっても、論文にした時、全部起こされたらとてもたまらないので、適当に抜くんですね。適当な抜き方は科学的なのかと言うと、その根拠は何か。そんなのは無いですね。結局、適当にもっともらしく理屈でこじつけているだけです。逆に言うと、適当な言い訳こそが重要だとも言えますが。いずれにせよ、多かれ少かれ圧縮せざるをえない。圧縮するリスクをちゃんと理解することが大事で、どういう形で圧縮していて、どういうリスクを背負っているかということは大事だけど、どれが最高にいいのかということはないのだと思います。

やまだ 言っていることは多分同じだと思います。ただどういう圧縮の仕方をしているかということのリフレクトする時、別のソースのデータを対話的に併用することによって、「自分はこういうふうには抜きとっているのだ」ということを自覚することはできる。いくつもの限界があるんですけど、データのとり方を比較することが、テキストを書くとか読む時に重要になるということだと思います。

サトウ どうもありがとうございました。もしどなたか質問があれば会場から。

〈質疑応答〉

能智（東京大学） 日誌と言いましても、質の高い記述と低い記述はあると思います。フィールド研究でも同じなんですけど、できるだけたくさん書けと言われても、圧縮すると言っても自分の頭の中で抽象的な言葉で解釈する人とか、直観的には丁寧に書くということがあるんですけど、先生方の中で「日

誌におけるよい記述、これは留意した方がいいということかあれば教えていただきたいと思います。

麻生 基本的には日誌観察をした場面に、自分がかもう一度戻れるかということが、私には一番重要です。つまり、自分が自分の日誌観察を読んだ時に、その時に自覚したこと、感じたことを再び蘇らせ、目の前にもう一度かつて体験したシーンを再現できるかがポイントです。そのために、私が重視しているのは、必ず観察記録に「その場の空間的な情報」を書いておくということです。自分がどの位置からどう見ていたのかといった手掛かりを残しておかないと、後からどういう場所だったか分からないようでは、書かれたエピソードもピンときません。その時に「これはすごい」と思ったとか「オヤッ」と思ったとか、自分の情動体験も書いておくと、自分がかもう一度そこに行く（すなわちタイムトリップですが）ときに大いに助かります。出来事の信憑性というだけではなく、もう一度そこに戻っていくために、その時の情動的な気分を書いていくと、もう一度その場へ戻りやすいということがあります。

秦野 先程の多次的ないくつものテキストにかかると思うのですが、私は子どもの行動観察をする時には、できるだけ「子どもが喜んだ」という言葉にしないで「両手を上下に振って、キャッキョッと甲高い声を出しながら、満面の笑顔で、両足をバタバタさせて、あわあわと言いながら何々した」というふうに行動を記述して、それを自分が喜んだというようなことをカッコに入れるとか、できるだけ再現性を行動レベルで記述するようにしました。自分はパッと見て喜んでいるとはわかるのですが「喜んだ」「悲しんだ」という言葉にできるだけしないようにしました。その場その場で書いていくことと、1日を振り返って書くことと、1週間くらいして「前はこうだったけど、この頃こうなったようだ、なぜだろう」と振り返って書くことを織り混ぜたノートをつくっていたのです。日記と日誌の違いという話がありましたが、その場、その場でできるだけ書けばいいということではなく、記憶はその時の方がいいのだけど、1週間振り返って初めて見えてくるものがあることもノートにちゃんと書いておく。後で、思わぬときに役に立ったような気がします。

麻生 一つ補足します。さきほど空間的なことと言いましたが、これは好みの問題で時間も入れて、1分ごとにタイム算定しているわけではないですが、13時何分にこういう遊びをしていたとか、15時までやっていたんだなということが後でわかりますので、空間と時間はどのくらい移動したか、わかるためには重要なと思います。

サトウ それでは時間の話が出たので時間のくぎりをつけたいと思います。今日は「日誌研究会について語る」ということで話を進めてまいりました。貴重なお話を聞かせていただいた登壇者の方に拍手をお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。